

聞きとり調査

帰還後二年癒されぬ抑留飢餓

岩手県 中島 忠 治

私は戦時中、左官のときに徴兵検査をいたしましたので、第三乙といういかにも小さい体というか弱体な体であっても、元気に見られましたので、相当苦勞いたしましたが、私がアツツ島要員ということで十八人でしたが、北千島に行ったのです。行って、北千島からアツツ島へ行くのが行けなかったのです、北千島に残ってしまいました。山崎部隊長の本部要員は全部アツツ島に三回目に潜水艦で北千島から行ったのです。私たち部隊はそこに残ってしまった。そしてソ連と交戦

をしたのが、終戦後の八月十八日ごろだったと思うのですが、北千島の占守島というところが日本の最北端の島なのです。そこに夜、カムチャッカから長距離大砲で北千島に攻撃を受けるわけです。それで私たちは知らないものだから、戦闘準備ということでコクタンという島へ行ったわけです。そして、ソ連と三日間ばかり戦闘いたしました。その三日間というのはソ連と一戦をしないと後に戻ることもできなく、戦争ばかりの三昼夜で、その間に降伏したということがだんだんとわかりまして、この守備兵は竿を立てて上げるということで命令を聞きながら白旗を上げたのですが、ソ連の兵隊は言うことを聞かなくて、進んで来たのです。そして私たちの小隊も全滅いたしましたし、その間に三回ばかり軍旗というものを発見しまして軍旗を立て

て武装解除。将校以下三人ばかり兵隊を連れて、軍曹を派遣したのですが、それでもなお、軍曹も弾にやられて死んでしまいました。そしてついに島の中でございましたので下がれとの命令のもとに下がってきたのですが、占守島の南の端の長崎というところに全部下がれというものだから、退却しながら白旗を上げても言うことを聞かなかったので、兵器を持って下がって来たです。ところがもう隣の島からも応援隊も来ましたが、いくら白旗上げても何とも言うことを聞かなかったので、仕方なく私たちも上官の命を受けて、射撃してくるものですから、反撃をしたのです。やはりソ連の兵隊も相当犠牲者も出たと思うのですが、そして、したところがソ連でも白旗を上げて、そこで終戦を迎えたわけです。

終戦は北千島の占守島でございましたが、その後武装解除ということで片岡飛行場というところに集結をいたしました。そしてそこで、皇居の方を向いて君が代のラッパを吹いたときはみんな残念だというような感涙の涙で男泣きに泣いたことを記憶しております。

そしてその後一か月ばかりか戦場整理ということで、防空壕とかトーチカとかいったようなところをソ連の兵隊のもとでその戦場整理、爆薬を取り出す作業を一か月ばかりいたしました。そして十月の初めだったと思うのですが、日本、内地に帰すからということでダモイ東京とかそういう話が出て来しました。いずれ負けた兵隊でしたので、ソ連の言うことを聞きながら、ダモイ東京ということで船に乗って、それから三昼夜ばかりだったと思うのですが、着いたその朝は、もう木のない禿山に道があったところに着いたのが、今の収容所とかマガダンという町でした。後にそれがわかったのですが、それからこの船が着いたところから、上陸して伐採作業ということになったのですが、それからまた港から四キロぐらいばかり奥の方に行ったところがシクラナヤとかサステンという場所でした。そこであと一週間いれば日本内地へ帰すからとか、そうして一週間を楽しみに働いたのですが、その一週間が近くなると、またあと一か月たたねば日本に帰さない。そう言われて、それでもまた希望を持ちながら

働き続けたのです。それもまた一か月が近くなれば、あと三週間とか、二十日とたまされ続けながら三年間ばかり捕虜になって働いたのです。

そのうちに私はそもそも弱体でしたので第一回目にはもう倒れてしまいました。もちろん盛んの青春時代でしたので、食べただけ食べられたら人に負けないような気迫は持っていたのですが、なにせ食べ物には限界がありまして減量されたような食べ物でしたので、腹いっぱいいつでも食べたいという念願を持ちながら、毎日作業に出たものです。冬になれば朝十一時朝日が出、午後二時になれば夕日になってしまふ。その間であってもやはり八時間は働かなければならなかった。そういう中で、あるときは食券をもらって食堂に行ったときは、パンと朝ご飯を持って板に並べて、宿舎は食堂でしたので、食べる先に行き帰りの中でパンを取られたり、まるで動物のような生活になってしまったのです。私は先に倒れたものですから、医務室当番をやれと言われてソ連のドクトルのもとで働くことになったのです。ドクトルには私の気持ちをくんで

いただきました。「中島は出なくてもいいから」というようなありがたい私にとっては命の恩人といったような気持ちを今でも持っています。本当に助けられたなと地獄で仏を見つけたような感じでした。倒れる前はなにせ朝におかゆの朝食とパンの昼食をもらうものですから、作業に出る前の朝食時間のあと三十分ほど時間があるのですが、その間にパンを出して角をとってみたり、皮をとってみたりしてそのうちに真ん中も食べてしまふ。ある者は残して昼食に持って行こうとしても、みんな盗まれて食う物もないという現況でしたので、私も我慢もできないからそれを食べてしまふ。そして作業に出てしまえば昼にはやはりソ連の監視兵が雪の中で一時間の昼食時間にパンを食べる。その食べているのを各兵隊がみんなパンに目を向けて瞬きもしないで見て、故国日本で小さいころ食べた、かぼちゃ団子がおいしかったとか、キビ団子がおいしかったとか、うどんもうまかったとかいう食べ物のお話ばかりしているうちに、ソ連の兵隊が皮でも固いところを投げるといって、みんなその争奪戦でした。たばこな

ども投げればすぐ行つてそれを拾つてだれかが吸つて
いると、吸い口に手をやって「おれさも一服だ、おれ
さも一服だ」といった感じで、考えられない環境の中
で暮らしてきたものです。

仕事にはノルマがありまして、体に見合つた作業量
を決められていました。私たちにはとてもそれができ
なかつたのです。二二〇%とかノルマ以上稼いだ人は、
おかゆがどんぶりから盛り上がったような食事をとつ
て働いた人もいるのですけれども、ほとんどの人はノ
ルマを稼げないで平均のすりきり一杯で終わるのとし
た。いつも腹いっぱい食べたならノルマも完遂しただろ
うという気持ちばかり持っていました。作業が終わつ
て帰るときには馬の背中のような雪の道をすつてんこ
ろりと転びながら、宿舎に帰るのですが、転んだと
きには悪口を言うのですが、だれも起こしてくれる人
はいないのです。自分で起きて、宿舎に帰つて来られ
てああよかったなと思うのです。夕食を一番の楽しみ
にして帰つて来て、その夕食も腹いっぱい食べたいと
いうことで、岩塩をみんなで分けて持つていて、塩と

水と火というのは、いくら原始人でも必要だなという
ことを感じました。この塩を入れて湯をわかつて足し
て、二杯も三杯も飲んでその後におかゆを食べました。
その満腹感是非常に私たちにはうれしかったのです
が、その後が大変で、夜になると、小便に十三回も十
五回も起きるという始末でした。そして眠れない、寒
いという繰り返しでしたので、体の弱い人はいっせいに
栄養失調になりました。医者（ドクトル）の診断が
厳しくて、やせたとかこけたとかではなくて、もちろ
ん聴診器も当てますし、いつも悪い人は診断を受ける
のですが、肋骨のガラガラとなつたところを棒のよう
なものでこすつてみて、早く血が出れば、まだ働ける、
仮病だというような厳しい診断でまた働かせられるの
です。風呂に入ると肩甲骨の中に湯飲み茶碗一杯くら
いの水がたまりまして、体を逆さに傾けるとゴゴツと
流れるような状態でした。便所に一週間ばかり行かな
くて、行つたときはそれこそ端というか繊維のあるも
のが出るのですから、富士山のような格好のそれを振
り返つて私は見ました。そしてこれが全部身になつた

らどんなに体のためになるだろうと思いました。みんなもおそらくそう思ったと思います。そういう中で働いてきました、ドクトルのおかげで私は、命からがら無事に帰って来たのですが、いずれ中島は第一便のボルノエ患者で帰すからという言葉でしたので、それを信じながらマガダンから船に乗ってナホトカに帰ったのです。それも二昼夜ほどかかったと思います。そしてナホトカでも、それ相当の民主教育というか赤旗のようなものを教育されまして、舞鶴に向かったのです。

舞鶴に着いたのは十一月でしたが、きれいな日本の姿を見て、本当に庭園のように見えました。感激の涙で泣いたことを思い出します。家に帰ってから栄養失調で二年ばかり床に着いたまま、たまには往診を頼みました。が医者にもかかれず毎日を過ごしたのです。食べ物については非常においしいな、何もおかずがなくとも大丈夫、食べられる。このくらいありがたい食べ物はないなと感じたのです。ライスカレーを七杯ほど食べたのを記憶しています。まだ食べられると思っ

たのですが、家の者たちにやめろと言われましてやめたこともあります。助かったことをあのソ連のドクトルに感謝を申し上げる次第ですが、今でももし会えるなら私は会ってお礼がしたい。そういう気持ちです。

炭坑から警備兵宿舎へ

熊本県 山形 満治

国境をいつ越えたのか、はつきり覚えてはいません。収容所に着いたのは昭和二十年十月の初めではなかったかと思います。かつての収容所跡は柱だけが残っており、次の日からバラックつくりにかかりました。

金釘にはワイヤを切断して使い、屋根にはシートを覆い、ベチカには近くの炭坑のトロロコを引っくり返して使うことになりました。鉄条網は初め一重でしたが、逃亡兵が出るようになったので、二重に張りめぐらせました。四角の望楼は、ソ連の警備兵が建てたのです。作業は石炭掘りでした。炭坑は斜坑になっており、